

色部長門日記とエドワード・スネル

阿 達 義 雄

Irobe Nagato's Diary and Edward Schnell

by

Yoshio Adachi

は じ め に

本稿の第一部は『色部長門日記』に現われてくる「スネル」「平松武兵衛」「平松武平」「平松」等の用例を、この日記中の表記、その出現日、および出現頻度等によって調査して、スネル又は平松武兵衛と称されていた人物に兄と弟との別あることを明らかにしようとしたものであるが、なお、之を石山源内の『越後御出勢日記』『長尾景貞日記』による調査によって確認しようとしたものである。

第二部は『色部長門日記』を通して新潟奉行所内の新潟会議所において議されていた新潟開港問題をエドワード・スネルの言動を中心として考察したものであり、最後の章の「ストーン・ウォール購入問題」は、直接新潟開港問題とは関係がないものの、北方政権（奥羽越列藩同盟）の存立の成否にかかわり、当初は兄スネルが之に関係して、その名を見せたが、兄スネルが（米沢を経て）会津へ去ってからは、弟スネルが之に夢を托していたように考えられるので、参考迄にこのストーン・ウォール購入問題にも触れてみたいと思う。

本稿において、新潟における平松武兵衛に殆んど触れなかったのは既に『平松武兵衛の中越戦線巡察』（『長岡郷土史』第17号）において詳述したからである。

なお、『色部長門日記』について附記するならば、この日記は慶応4年5月12日、色部長門の率いる米沢藩第二軍の米沢城出発から、新潟沖に官軍々艦の現われる7月25日迄のことを個条書に記した覚書式の日記であり、あり合わせの粗末な紙片に記し、順次書き溜め、無造作にコヨリで綴じ、表紙に『越後の略記』と書いてあるが、之は新潟奉行所より本日記帳を持ち帰った米沢藩士又は色部長門の家人が後で記したものと認められる。

所蔵者西条信哉翁（米沢市）は本書の裏面に、

「昭和三十四年八月、色部長門追念碑除幕式に参加之為正長氏来米の節、寄贈されしものなり。

西条宅に宿泊の際手渡しされる」（西条印）

と記されており、当主正長氏は色部長門の曾孫に当たるとのことであるが、その時迄、この日記の存在は世に知られていなかったものである。

〔第一部〕『色部長門日記』とスネル兄弟

米沢藩家老色部長門が新潟奉行代理田中廉太郎光儀の請いを容れて、新潟を米沢藩の仮預所とし、新潟管理の任についたのは慶応4年6月1日のことであった。

会津藩家老梶原平馬等はそれ以前から新潟に駐屯していたが、奥羽越列藩同盟の代表者会議が仙台松井邸で開催され、欧米列国公使への声明書案文を携えた仙台藩家老輩名親負を全権とする

一行が6月10日に新潟に到着した頃には、庄内藩重臣石原倉右衛門 其他列藩同盟諸藩の重臣も参集し、一同協議の結果、新潟の管理は米沢藩が主となり、奥羽越列藩が之に協力して当たることになっていた。

このために列藩の重役および役人の席を奉行所屋敷に定め、(注一) 諸経費は新潟港の運上(関税)を之に充てる事とし、地役人は従前通り町人より選任した検断町老以下に任せることとし、新潟奉行詰の列藩主要人物は次のようであった。(注二)

仙 台 藩 葦名鞆負・牧野新兵衛・玉虫左太夫・富田敬五郎・横尾 東作・金成善左衛門・星狗太郎・新井常之進
 米 沢 藩 色部長門・大滝新蔵・佐藤源右衛門・黒井小源太・山田 八郎・落合龍次郎・宇佐美勝作・小田切勇之進
 会 津 藩 梶原平馬・手代木直右衛門・神尾鉄之丞・唐沢 源吾・萱場安之助・片桐弥九郎・田中茂手木
 庄 内 藩 石原倉右衛門・本間友三郎・総 助
 村 上 藩 近藤幸次郎・平井伴右衛門・鈴木四郎右衛門
 二本松藩 奥田弥平右衛門・山田次郎八
 新発田藩 溝口内匠

実際においては、この頃からの新潟奉行所には、従来の奉行所業務の外に之を統轄する奥羽越列藩同盟の機関であった新潟会議所が加わったものと考えられるが、この奉行所詰の各藩の人物は必ずしも新潟に常在せず、名儀だけの者もあったようである。以上の人物の中に長岡藩の者の見えないのは全藩を挙げて死闘中であつたので、新潟会議所へ人を割けなかったのであろう。

本稿の目的は、戊辰慶応四年、このような新潟奉行所又は新潟において、問題のスネルなる外人が如何なる役割を演じていたかということの探求であるが、今回はこのスネルを主として『色部長門日記』によって調査し、なお、客観性を期するために、色部長門の「御馬脇」であつた石山源内の『越後御出勢日記』、米沢藩の軍目付の『長尾景貞日記』を補足的に調査してみたいと思う。これは、その人の地位によって、その立場からの視角の差が予想されるからである。

I 『色部長門日記』

私は、先ず新潟奉行所の首長であり、奥羽越列藩同盟の新潟地区の総督であつた色部長門が新潟又は新潟奉行所において、どのような人物に、どの程度の関心を持っていたかということを客観的に明らかにするために、『色部長門日記』の中に記されている人物と、その出現頻度数を調べてみることにした。

勿論、『色部長門日記』は当座備忘用のメモに過ぎなかったと思われるので、中には判読のできないもの、或いは幾人かの同姓の者があって、そのいずれとも決し難いものも見られるが、これ等は極めて少なく、数的には全体の大勢に殆んど影響がないものと考えられる。

尤も、私が出現頻度というのは、或日の日記に、その姓(名)が二回記されていれば二回。三回記されていれば三回として数えたものである。

このようにして『色部長門日記』を調べてみると、現われてくる人物の数は226名であり、その中でも出現頻度数の特に多いのは次のようである。

◎スネル(弟)……………15回 (第1位)

○スネル(兄)……………12回 (第2位)

●「スネル兄弟」……………1回

すなわち、「スネル兄弟」として出てくるのは僅か1回に過ぎないが、弟のスネル(エドワー

兄 ス ネ ル	平 松 武 兵 衛	2	12
	平 松 武 平	4	
	平 松	5	
	スネル(6月25日)	1	
弟 ス ネ ル	スネル		15
	ス ネ ル 兄 弟		1
	合 計		28

ド・スネル)の意味で出てくるスネルの出現頻度は15回であって最高であり、兄のスネル(ヘンリー・スネル)は、「平松武兵衛」「平松武平」「平松」「スネル」(これは6月25日の1回だけ)など、その称呼はいろいろであるが、合計頻度は12回であって第2位である。

なお、この内訳を明記してみると、弟スネルは何時も唯「スネル」と記されているが、兄スネルは弟のスネルと区別するため、多くの場合は、「平松武兵衛」又は、その略称で記されている。

その上に、両者を一緒に呼ぶ際には「スネル兄弟」と明記しているから、一般学者の説くスネル一人説などは、

『色部長門日記』についての調査によれば全く存立し得ないものである。

次に第3位以下の高頻度の者は次のようである。

〔第3位〕	大 滝	7	} 10……………米沢藩軍監、大滝新蔵
	大滝六老	2	
	大 滝 隊	1	
〔第4位〕	梶原(平馬)	6	} 7……………会津藩家老
	松平平馬	1	
〔第5位〕	安田幹雄	7	……………旧幕臣(一千石)
〔第6位〕	黒井(小源太)	5	……………新潟奉行所詰米沢藩士
〔第7位〕	長(名美衛)	5	……………新潟奉行所御用掛
〔第8位〕	中条(豊前)	1	} 5……………中条豊前は中越派遣米沢軍大隊頭
	中条隊	4	

以上の括弧内に記した名は、日記には省略されているものである。

なお、出現頻度4回の者を一括して記してみると。

- (上杉)主水様……………上杉主水勝鷹、米沢藩主の従弟
- 佐藤市之允……………米沢藩士
- 玉虫左太夫……………仙台藩家老
- 山口謹一郎……………米沢藩士
- 神保 乙平……………米沢藩士
- 青木(文四郎)……………米沢藩士、新潟奉行所(当分)下役仮役
- 真野(寛 助)……………米沢藩士、前勘定頭、新潟奉行所御用掛(当分)

この外、単なる「佐藤」も頻度4回であるが、佐藤には市之允のほか同姓の者が数人もあり、いずれとも判別ができないので除くことにした。

すなわち、各々の姓名を一々丁寧に記したものではなく、色部長門の覚え書き、メモの走り書きが多いので、細部まで正確を期することができないものの、色部総督の次席として、常に傍にあって助けてくれた軍監の大滝新蔵や米沢藩としては最も重んじていた会津藩の家老梶原平馬など出現頻度の多いのは当然のことであろう。

また、旧幕臣の安田幹雄は新潟側の訓練指導者として重要な人物であり、長名美衛は年長の米沢藩士、奉行所の御用掛として、長門も一目を置く程の人物であった。

黒井小源太の覚書『七月朔日新潟奉行所ニ而応接』を見ると、この小源太も新潟会議所の重要会議には出席していたものと考えられる。

前掲のスネルの出現頻度一覧表において、6月25日に出てくるスネルだけは兄のスネル、即ち平松武兵衛であることを注記したが、之については『色部長門日記』の6月25日の条には、

「スネル朝に暇乞に到来、関に罷越候事」

とあり、『上杉斉憲公御年譜草稿』巻之四十七を見ると、「二十六日、平松武兵衛召出サル」とある。したがって、右の「スネル」は6月25日朝、色部長門に暇乞を告げて関に向かって出発し、当時下関に滞在中の米沢藩主、上杉斉憲公に翌26日に面謁しているからである。

出現月日	外国人名
6・28	シニシトフル
7・14	ブリス
7・14	モンフン
7・16	ハリス
7・16	プロラン
7・20	フリー

なお、これについては高嶋米吉氏も『郷土よこはま』（第62号）の「ゴールドヒルの平松スネル」の中に、

「六月二十六日（慶応四年）越後戦線をかけ廻っていた平松武平は、下関滞陣中の米沢藩主上杉斉憲から呼出しをうけ、（斉憲公御年譜第四十七、慶応四年六月）ついで、七月二日、米沢城下に到着、命によって東町植木彦兵衛方に宿をとった」と記されているから、6月26日以後に色部長門日記に現われてくる「スネル」は、みな「弟のエドワード・スネル」である。

次に、『色部日記』に現われてくるスネル兄弟以外の外国人の名を挙げてみると左のようである。

以上の6名である。ただ、之が厳密に6名であったか否かについては、『長尾景貞日記』に見える外人名と比較対照して検討してみたいと思う。

Ⅱ 石山源内『越後御出勢日記』

以上の『色部長門日記』に現われてくる人物と長門の従者石山源内の『越後御出勢日記』（以下、略して『源内日記』と記す。）に現われてくる主なる人物とを比較してみるために、『源内日記』に3回以上出てくる人物を示してみると次のようである。

ただし、源内は自分の主人のことを色部長門とは言っていないので、之は固有名詞に拠らず、彼の称呼又は記載に従って、「旦那様」「御上」「御総督」なども採ることにした。

旦那様	19	}	29
御上	6		
主人	2		
色部総督	1		
御総督	1		
大滝新蔵	2	}	8
大滝御年寄	2		
御年寄	4		
梶原平馬	3	}	6
会津藩家老	3		
スネル	5	}	6
スネル弟	1		
スネル兄弟	1		

（「源内日記」では、兄スネル即ち平松武兵衛を）
単に「スネル」と記した例は見当たらない。

渡辺三左衛門	4	（下関の大庄屋）
（上杉）主水	3	（米沢藩主の従弟）
須藤美保吉	3	（米沢藩士）
山口謹一郎	3	（ 〃 ）

土沢直吉…………… 3（色部長門の御馬脇）

なお、調査に当たっては、『源内日記』においては、その記事が明治2年にも及んでいるので、『色部日記』との均衡を考えて、明治元年7月25日迄を調査の対象とした。

で、『色部日記』に出てくる人物226名に対し、『源内日記』の方は枚数が多いに拘わらず、出現人数は80名である。また、3回以上出てくる人物も9名に過ぎない。

これによって見ると、『源内日記』が自分の主人（旦那様たる色部長門）を中心とした源内の身辺日記であったのに対し、『色部日記』は新潟奉行所に出入する人物、そこに関係ある人物や用件についての備忘日記であったことが知られるであろう。

ただ、両者に共通していることは、梶原平馬、スネル、（上杉）主水様の出現が多いということである。之は色部長門の従者（御馬脇）たる源内の日記としては当然のことと思われるが。

いずれにあっても、スネル、特に弟スネルが屢々記されていることは、新潟奉行所、新潟会議所におけるスネルの地位を考究する上からも重要だと思われるが、次に念のために新潟における米沢藩の軍目付長尾景貞の眼に、このスネルが如何に映じていたかを、景貞の日記によって考えてみよう。

Ⅲ 『長尾景貞日記』

長尾景貞日記の原本には、米沢城出発の時から新潟陥落の頃迄のことが記されていたものと思われるが、私の見ることのできたものは、『大日本維新史料稿本』（東大史料編纂所）の中に見られる慶応4年7月9日から7月24日迄の間の日記であって、この間の6日分の日記が欠けているので、実際は10日分の日記に過ぎないが、比較的詳しく記されてあるという点において長門日記や源内日記とは異なっている。

この中に出てくる人物の数は合計41名であり、この中でも出現頻度数の3回以上の者を列記してみると次のようである。

スネル…………… 8回	スネルブリー…………… 3	} 4回
色部長門…………… 1	ブリー…………… 1	
総 督…………… 5	安 田 幹 雄…………… 3回	
関 文 治…………… 3	黒 井 小源太…………… 3回	
関 隊 長…………… 2	唐 沢 源 吾…………… 3回	
関 隊…………… 1	田 中 茂 手 記…………… 3回	
山田民衛…………… 4		
山 田 隊…………… 1		

すなわち、『色部長門日記』と同様にスネルの出現頻度が最も多く、また、この『長尾景貞日記』の記事は、みな平松武兵衛のスネルが新潟を去って下関へ向かった6月25日以降のものであるから、これ等はいずれも弟のスネルである。

なお、「スネルブリー」と「ブリー」は仮りに同一人と考えて一括して示してみたが、これらが前述のスネルと如何なる関係のものかについては次に検討してみたいと思う。

「スネルブリー」というのは7月14日に次のように記されている。

「一、プロイセンのスネルブリーと申者（屋）後役所へ罷出、仙会米庄か発向の重役談判有之、右談判の趣大略左の通

スネル等申出候者奥羽越之大義を企候者素より義理の当然にて、海外萬国ニ至迄感称せぬハなし、乍併、軍略不練のため墓々敷利運も無之甚残懷ニ不堪、其内承り候者賊軍ニ而英吉利人を雇ひ候由、此者の軍略故、戦略機ニ当り候との事、就而は是より西海上幾千里を隔てサイコ

ンと申所有り。此所に三千人程の兵を擁して、日本の戦争を窺ひ居、何れにも勢強方に味方致し候との由に御座候、依而ハ奥州より蒸気船を以、早速御頼有之候ハハ必御味方可致存候間、右の御手配有之度、尤右所の談判には我々直ニ也共、又我々手の者なり共可遣、左すれハ彼賊徒恐るに足らず、乍去、当時蒸気の有合ハ無之候ニ付、其手配だに被下候ハハ、右の件々宜敷可取量との厚意の申立有之、依而各藩評議ニ被及候ヘ共、蒸気船の有合ハ無之、其内庄内ニ而備置候蒸気船借受候而可然との評定ニテ、会議ニおゐて出席の庄内衆ニ談判有之候所、庄内の挨拶には、国元にては隣国秋田の憂ひも有之、萬々御引受致候とは難申候ヘ共、適れの大事に御座候ヘハ、明日にても早速当地発足国元江罷越、右の件々重役江引合、相成丈は御用ニ相立候様取量可申との事に而右の趣評判相決候事

とあり、なお翌15日には、

「一、昨日奉行所に而スネル江談判の一条ニ付、庄内より新潟表江出張致居候会議詰の役人高木丹吾、昨日中、国元蒸気船周旋のため発足致候由」

とあって、14日のスネルプリーは、上述15日のスネルであったことが明らかであるが、なお『色部長門日記』の14日の条を見ると、

「一、奉行所へスネル並フランスの騎兵差図役並プリス入来、薩に而フランスのモンフンと申者相頼候に付、当表に而もシナの先きサイコンより卅人相頼方評判なりき。右に付、庄内船借受候方治定に付、同藩早にて罷戻る。」

とあって、前記『景貞日記』のスネルプリーというのは、『色部長門日記』14日の条の（エドワード）スネルに当たることが確認される。

「スネルプリー」は『長尾景貞日記』の7月18日にも出てくるので、参考のため所用箇所だけを示してみると、

「一、五半時頃会津旅館真浄寺江参り、会藩唐沢源吾、仙藩牧野守衛、庄藩仙陽庄惣作我藩よりハ我等同道ニ而、異国人スネルプリー旅館江罷越サイコン行きの入費如何程に候哉、右の談判致候処、サイコンは仏蘭西領ニ而、是より千五六百里も可有之、右往來の船賃、石炭料、三拾人程相雇ひ、日料彼是取合三万兩余も相懸り候との事、其外彼是の雜費も可有之由ニ付、猶各藩評議の上にとて罷戻り、直ニ会議所江出席衆評ニ相及候事

一、右スネルプリー談判の儀ハ先方ニ而申事ハ我々一向不相分、先ニても此方の言葉ハ不弁、会藩田中茂手記と申士ハ先年数年の間、西洋諸国江渡海、英仏等の学を極め帰国致候人にて、今日も右の人通辞ニ而右云々談判ニ相及候所、田中氏の言葉ハ則異国人之詞に少しも無別儀、何事も早速ニ相分り驚入申候」

次に『長尾景貞日記』7月20日の条には、

「一、今日朝飯否惣督より呼懸ニ付、八町同役罷出候処、今日八時プリー海岸大砲台場見積呉候ニ付、各藩より壱兩人ツツ出張可致段ニ付、我々よりも壱人出張の様御達ニ付、其刻大滝六老、小杉同役馬上ニ而出張有之、尤安田幹雄方始諸藩よりも馬にて出張有之候事」

とあって、このプリーがスネルプリーの略称であることが容易に理解されるが、『色部長門日記』の7月20日の条には、

「一、フリー海岸巡邏いたす」

と記されているので、この「フリー」は、「プリー」の「プ」の半濁音符号の「。」を省略したものであることが知れられよう。

*

*

*

さて、エドワード・スネルを何故に「スネルプリー」とも呼んだかということについては、私は、今の処、之を確証することができないが、山形県郷土史研究の宿老、今泉亨吉氏が『置賜文

化』第56号（昭和49年・7月号）に発表された「怪商スネル兄弟」という論文の中に、

(1) 色部長門の陣中日記を見ると、5月晦日の条に平松武兵衛とあるが……『米沢戊辰実記』の慶応4年8月の条に「スネル・バルリの兄平松武平」とある。これで見ると、平松とあった場合は兄で、スネルとあった場合は弟と考えてもよいと思われるが、外の記録では必ずしも判然としない場合が多い。

(2) 弟エドワードスネルの名が、はっきり出てくるのは、文久二年（1862）で、この1862年2月に Edward W Schnell の名で、「萬国航海図」を横浜で出版したということである。とあるが、上記の(1)の「スネル・バルリ」はエドワード・スネルに当たるが、この「バルリ」がバルリ→プリーと転化したもののように考えられ、また、エドワード・W・スネルのWを頭音とする呼名が音転化して、プリーに変わったものとも思われる。成程、口ずさんでみると、エドワードスネルよりも、スネルプリーの方が言い易くて軽快である。

〔第二部〕 新潟開港問題とエドワード・スネル

I 奥羽越列藩同盟の成立と外国公使への声明書

慶応4年3月19日、奥羽鎮撫総督九条道孝は、薩長兵とともに松島湾に上陸して、仙台藩に会津討伐を命じた。この時、庄内藩討伐の勅命も下されていたので、4月14日には副総督沢為量、参謀大山綱良を出羽新庄に向わせ、庄内攻撃を行なわせるとともに、参謀醍醐忠敬、世良修蔵を福島に派遣し、仙台藩の会津討伐を督戦させることになった。

閏4月4日、仙台、米沢両藩主は会津藩からの嘆願書を取次ぎ、同時に両藩老臣の名で、会津救解の嘆願についての会合を仙台領白石で行なうために奥羽諸藩に檄を飛ばせた。そして、この会合に参会した列藩重臣の連名嘆願書、松平容保の降伏嘆願書、仙・米両藩主の添書が岩沼にいた九条道孝に提出されたが、閏4月15日に右の会津救解の嘆願書を却下する旨の通知があった。

この頃、世良修蔵から出羽へ出陣中の大山綱良へ宛てた文書の中に＜奥羽皆敵＞の文字のあることを探知した仙台、福島両藩士は之に憤激して、世良を福島の妓楼で捕えて殺してしまった。これが奥羽諸藩を決起させる導火線となり、仙台藩は奥羽諸藩に征東軍の意図を知らせ、閏4月23日には奥羽25藩の重臣が白石に参集した。

ここで、総督府参謀の横暴、薩長の会津、庄内に対する私怨の非などを挙げ、会津救解を主旨として列藩同盟が結ばれ、更に5月3日には仙台北下に再度の会合が開かれ、北越6藩も新たに之に加入して、太政官への建白書や盟約の調印がなされ、このようにして31藩の奥羽越列藩同盟が成立した。

また、奥羽越列藩同盟は、薩長中心の新政府と対等のものなることを諸外国に公認させるため、この同盟の成立と、その結成の趣旨を列国の公使に告げようとしていた。

このことと新潟開港との関係については、次の佐々木克氏の一文が端的に之を語っている。

「当時、新潟港は正式に開港場となっていなかったが、5月中旬頃から外国人の渡来が頻繁となり、オランダ商人スネルは、オランダ領事と自称して上陸した。事実上の開港である。

諸外国は局外中立を布告しており、彼らが朝廷政府に対する交戦団体として、奥羽越列藩同盟を認めれば、同盟によって新潟が開港されることがあってもよいわけである。」

（佐々木克著『戊辰戦争』）

スネルが新潟に上陸したのは、慶応4年5月12日のことであって、これより先、オランダ、イタリヤ、プロシヤ等の公使は、新潟開港の期日を5月26日として、之をその国民に告げていたもので、スネルは之を見越しての新潟上陸であった。

仙台の方では、新潟は戊辰の春以来開港され、プロシヤ領事が滞在していたと考えていたので、列藩同盟の成立を、先ずプロシヤ領事に告げることになり、列藩代表は仙台松ノ井邸で会議し、欧米列国公使への声明書案文を協議決定し、仙台藩家老輩名鞆負を全権とする一行を新潟に派遣することになった。この一行は5月26日に仙台を発して、6月10日に新潟に到着した。

〔注〕 声明文の案文……「この草案は新潟駐在の列藩代表が、プロシヤだけでなく、各国公使、領事に送る必要を認めて草案を修正している。」

(石井孝「明治維新の国際的環境」分冊三の869頁)

II 『色部長門日記』に見える新潟開港評議

『色部長門日記』の6月16日の条を見ると、声明書の案文の決定に議論があつて、エドワード・スネルの意見を聞く必要があつたらしく、

「スネル御国表迄参り候よし相聞候に付、当表交易等又は諸港総督の激文不定に付、早速参り候様申遣候事」

とあるのは、この頃スネルがイタリアの蚕種商人と共に米沢領置賜地方に行っていたのを、至急呼び寄せようとしていたことが知られる。

すなわち、最初の案文はプロシヤ領事宛に考えて作成されたものであり、元来、プロシヤ人であり、外交文書にも習熟していたスネルの意見を必須的なものとして考えていたことが分る。

なお、『色部長門日記』6月17日の所に、

一、宇佐美今朝関へ罷越す。右者加州へ御直書の件

一、昼後於役所相会左の通り

仙	芦名 鞆負	牧野新太郎	玉虫左太夫	富田敬五郎
	横尾 東作	金成藤左衛門	星 恂太郎	新村常之丞
(会)	梶原 平馬	手代木直右衛門	神尾鉄之丞	唐沢 源吾
	萱場安之助			
庄	犬 塚 極			

右之通出席諸港へ文面之評、且、加州へ御使者之評云々有之酒差出す。

○夜中、青木関迄遣す、右はスネル一条なり。

冒頭の条に、宇佐美を関本陣へ派遣させたとあるのは、米沢藩主から加賀藩へ直書を送って貰うように依頼するためであろう。之を前日の「玉虫左太夫、新井常之進、神尾鉄之丞入来、加州へ御使者一条なり」と併せてみると、加賀藩には、少なくとも、中立の態度を要請するという件について相談し、これに基づいて、当時関本陣にあった米沢藩主の直書を懇願する使者を出したもののようである。

また、「諸港^(注三)へ文面之評」は各国公使領事へ送る声明文についての評議であつたと考えられるが、「夜中、青木、(奉行所の下役)関迄遣す。右はスネル一条なり。」と記されている处を見ると、この評議においては、スネルの意見を求めることが急に必要になったことが分る。

更に、6月22日の条には、

一、スネル迎へのため、青木(を)御国元迄遣候处、今暁早にて罷戻る。

一、諸港へ回文の義者、黒井、佐藤、会仙へ罷越候事

一、昼後、スネル兄弟来る、酒差出す。

とあるので、前にスネルを呼びにやった青木が今暁スネルと一緒に早駕で帰ったので、仙台藩会津藩の宿所へ之を知らせにやり。なお、外国公使等へやる声明書をどうして届けるかの件については、黒井小源太や佐藤市之允を会津藩や仙台藩の宿所へ相談にやることにした。

ここで注意すべきは、この日の午後、スネル兄弟が揃って奉行所へ挨拶に来たことで、色部は

之を喜んで酒を出して饗応しているが、翌23日の色部日記には、

一、池上岩次郎来る。スネル今晚の念に来る。

四時より奉行所へ出勤、仙会庄二本松出勤。

八ツ頃帰る。直に光林寺へ下宿替、今屋より御炊出しに相成り、汁計なり。

一、今晚はスネルへ暮より罷越す。^{屋前念}_{に出来}

とあるので、色部が、この日下宿替えをしたことが知られるとともに、昨日帰ったばかりの弟スネルが、自分の新潟不在中のことを聴く必要もあって、色部長門を招待しているらしいことが知られる。

池上岩次郎（宿屋兼料理屋の池上屋の主人であろう。）はスネルに代って、この日の屋前に「今晚の念に来る」というのは、「今晚は是非お出で下さるように」と念を押しに来たというのであろう。

尤も、新潟開港の件についての評議はまだ続き、『色部日記』には次のように記されている。

〔6月29日〕 一、スネル明日奉行所へ五ツ時過より罷り越し候様達す。

右は当港交易一条なり。

〔7月朔日〕 一、スネル面談、開港評に付き、五ツ時過奉行所へ出る。仙会我藩より兩三人づつなり。

一、庄内より石原倉右衛門、吉野遊平、高木丹吾、同断。

これで、弟スネルも仙会米庄の四藩各代表も揃ったので、交易や開港についての評議も一段落がつくことであろう。

以上『色部長門日記』における新潟開港協議等について、特に留意すべきことは、同盟側のこのような重要会議にあっても、色部はエドワード・スネルを会議において、必須的人物、顧問格として遇していたことである。

Ⅲ 新潟会議所における弟スネルの発言

前述の7月朔日の評議内容の一斑は、黒井小源太覚書『七月朔日新潟奉行所ニ而応接』によって、かなり具体的に知ることができる。次にその要所を抄出してみよう。

〔●はスネルの言で、○は四藩代表の言である。括弧内の平仮名交りの文は筆者阿達の注である。〕

● スネール

当港ニ大統領ヲ置ケベシ。仔細ハ奉行トコンサルト争論ノ事アリテ、本国ヨリ掛合ニ及ンデ捌ケ人ナシ。

○ 四藩代表

白石ニ宮アリ、閣老アリ、同所ニテ取扱フベシ。

（「新潟奉行とコンサルとの論争があって、コンサルの本国から掛け合いのあった際に之を捌く人がないので、新潟に大統領を置いたらよいと思う。」というスネルの意見に対して、四藩代表の者が、白石には輪王寺官公現親王がおられ、また、閣老——旧幕老中の板倉勝静、小笠原長行などが滞在しておられるので、それは、そこ〔公議府〕で取扱うから、その懸念はないと言ったというのである。

● スネール

御尤モ、此方之形勢、宮ノ御在所ニ列藩ヨリ一人ヅツ、ミニストルヲ置クナルベシ。其内ニ外国事務ヲ定ムル事欲ス。外国奉行ハ権輕シ、依テ大統領トノ間ニ全権一人置カンコトヲ欲ス。

宮ノ御座所ニ議政府ヲ立テ、各藩集リ事ヲ議スルカ。

(スネルの語——列藩同盟では宮の御在所の白石に各藩より一人ずつ代表を置くというのであろう。然し、其の内に外国事務を取り扱う者を定めて置いて欲しいものである。それにしても、外国奉行は権限が限られているので、外国奉行と大統領との間に全権を一人置いて貰いたいと思う。

宮の御座所に議政府を設けて、其処に各藩代表が集まって、事を議するのであろうか。)

○御尤モ。

●議政府ニ家老ヲ出スナルベシ。其長ニ板倉侯、小笠原侯然ルベシ。

○御尤モ。

●前条私ダケノ考ヘヲ申シ上ゲシナリ。御取捨ヲ願フ。

(同盟側の議政府には各藩の家老が集まって事を議するのであろうが、それ等の家老の長となる人物としては、板倉侯や小笠原侯が適任であろうというスネルの言に対し、四藩代表は「御尤も」と頷いている。

ただ、スネルも他国の最高人事に介入し過ぎたと思ったのか、前に言ったことは一私見に過ぎないのであるから、「御取捨ヲ願フ」と言ったのである。

また、この頃、外国の使臣から見ると、日本の政府は薩長側と奥羽越列藩同盟側との、いずれなのか不明であったので、次の対話があった。)

●各国ミニストル来リテ、政府イヅレニ在ルト問ハバ、如何ニ答ヘル。

○白石ニアリ。然レドモ、仮リニ三州(奥羽越)集リテ、真ノ政府ヲ立テント欲ス。

●フロイスノミニストル来リテ問ハン。南北西部ニ立テントスルカ。一ニ定メントスルカ。

○奸賊(薩長)ヲ除イテ、帝ノ政府ヲ定ムルト答ヘン。

(●外国使臣が来て、日本の政府は南と北のいずれに在るかと問われたら何と答えるのか。○日本の政府は北の白石にあるが、南にも強大な勢力があるので、我々奥羽越の者は、北の白石に真の日本の政府を立てようと努めている。●プロシヤの使臣が来て問うであろう。日本は南と北に二つの政府を立てようとしているのか、それとも一つに統一しようとしているのかと、○私共は帝側の奸賊を除いて、真に天皇の政府にしようとしているのである、と答えるつもりである。)

上記の問答について熟考してみると、当時エドワード・スネルが新潟奉行所内で開かれた奥羽越列藩同盟の新潟会議所に出席して、如何なる役割を演じていたかということが知られるであろう。

以上によってみると、スネルとしては北日本政府(奥羽越列藩同盟)の首脳部から新潟にいて貰い、自分はその背後にあって之を操りたい処であったであろうが、既にその地が仙台領内の白石に決定していると聞いて、では、せめて新潟には北日本政府の大統領に代る強力な外交陣を誘致することを勧め、列藩代表もこの意見を大いに傾聴し、その方向に事を進めようとしていたのであった。

IV 横浜、白石への使節の出發とその後

外国諸公使、領事への声明書持参者について、『仙台戊辰史』には、「この書翰(声明書)は、仙台藩士横尾東作、会津藩士雑賀孫六郎、米沢藩士佐藤市之允の三名が、7月7日新潟を出帆して横浜におもむき、各国公使および領事に配布した」と記されており、『色部長門日記』には、

〔七月五日〕 「横浜へ使節、之を佐藤市之允に仰せ付けらる。」

〔七月七日〕 「佐藤市之允今日乗船」

とあるのは、色部が米沢藩士の佐藤市之允だけについて記したのである。

次に、7月9日の条には、「スネル奉行所へ来る。各国ミニストル(に)開港の書面認む。右に付、酒出す」とあり、更に7月8日の条には、

「開港に付き、スネル云々これあり、板倉、小笠原、竹中等当表へ御乗込み候様、宮様に歎願のため、各惣代輩名、黒井、会より一人、明後十日、白石迄早にて相越す事。」とあって、之がスネルの意見によったものであることは、「開港に付き、スネル云々有之」とあることや、次の文書によっても頷かれることである。

「新潟開港ニ相成候ニ付而ハ、外国之事情ニ相通ジ候全権之人、無之而ハ相成間敷と以前スネルも建議有之候由ニ而、当時、板倉侯小笠原侯而旧幕府之若年寄竹中丹後、奥州白石ニ逗留、日光様江附属被致候筈ニ付、右三人之内壱人当港に参り被呉候様、奥州列藩より使節ヲ以テ宮様江歎願ニ而可然との事にて、仙台よりハ家老輩名靱負、会津よりは唐沢源吾、我藩よりハ黒井小源太同道ニ而、不日ニ発足可有之段評定ニ相成候事」(『長尾景貞日記』七月九日)

尤も、これはスネルだけの意見ではなかったように思われる。

7月5日、色部長門は佐藤市之允を召して、横浜の各国公使への使節を命じたのであったが、それとともに、密かに討薩檄を横浜に頒布させ、^(注四)なお、榎本武揚を促して、軍艦を北越海岸に廻漕するように交渉させることにした。

これには、仙台・会津・長岡・庄内から各藩一名ずつ派遣するはずの処、長岡、庄内には適当な者がなかったので、佐藤は仙台藩の横尾東作、会津藩の雑賀孫六郎と同行することになった。

佐藤等は7月13日に横浜港に入り、各国公使に声明書を贈り、人を雇って討薩檄を市中に散布させていたが、官軍方の探索が厳しいので、仙台藩の横尾東作は、アメリカの九十三番館ウヘンリーートの館に潜匿中にウヘンリーートが商用で仙台に回船するというので、之に便乗して仙台へ遁れ帰った。

一方、雑賀は榎本武揚を説いて、その海軍を北越の海へ回漕させるべく開陽丸に赴いた。佐藤は横浜に残っていて、7月24日に薩摩藩士に捕えられたが、洗濯屋与兵衛と榎本武揚に助けられたという。

その後の佐藤市之允や榎本武揚の海軍については、今泉亨吉氏は次のように述べられている。

「佐藤は開陽丸の乗組員中等士官となり、榎本と共に開陽丸に乗り、八月十八日、八艦と共に横浜を出帆し、途中暴風に逢い、八月廿二日仙台塩釜に漂着した。

艦隊は破損し、石炭は欠乏したので、上陸して修理しようとしたが、奥地なので軍艦修理設備がなく、石炭もなく、陸軍兵隊の乗って来た軍艦も、ついに到来せず、その上、北越の戦線が大敗して、同盟も互解したと聞いたので、北越に回航することを止めた。」

(『置賜文化』第56号、今泉亨吉「怪商スネル兄弟」)

要するに、榎本の率いる旧幕艦隊の出動が時機を失したために、官軍に新潟港を制せられて、同盟側の瓦解を招き、今迄中立を表明して官軍側に甲鉄艦を渡すことを渋っていた米国の態度までも一変させ、その結果、絶対的に有勢であった旧幕艦隊も、甲鉄艦を旗艦とする官軍の艦隊によって窮地に追い込まれてしまった。

V 甲鉄艦 (Stone Wall) 購入問題

米沢藩越後方面軍参謀甘粕備後の『北越日記』5月28日の条を見ると、

「米沢藩総督千坂太郎左衛門、五月廿三日、米沢を出立、会津に赴き、五月廿四日、若松城に登城の際、松平容保父子に面謁し、越敵退治の軍議あり、折節、フロイス人スネル会津に來り、軍艦を買って高田を衝く策等を建議し……………」

とあるが、この軍艦というのは、当時、世界第一の堅艦甲鉄艦 (Stone Wall) を念頭にしての建議であり、既に官軍側もこの軍艦に目をつけて、頻りに手に入れようと暗躍していたのであった。

問題のこの軍艦は、慶応3年に幕府の使節がアメリカに行った時、約五十万ドルで買入れる約束で、幕府では五十万ドルのうち、四十万ドルは既に払い済みで、残りの十万ドルを支払えば、幕府に渡されるはずのものであった。

これが日本のものになれば、日本唯一の装甲艦となるもので、1,358トン、1,200馬力、甲板の前後に旋回砲台があり、前砲塔には300斤砲一門、後砲塔には70斤砲二門を備え、砲塔は厚さ約10センチの鉄板で覆われていた。(注五)

この甲鉄艦には艦長ブラウンが乗り込み、慶応4年4月2日、日本国旗を掲げて横浜に入港したが、当時、列強各国は局外中立を宣言していたので、横浜駐在のアメリカ領事フアン・ファルケンブルクは、直ちに艦長に命じて、日本国旗を降して、アメリカ国旗を掲げさせた。

これに対し、4月18日、神奈川裁判所総督東久世少将から之を受取りたいと談判があったが、米国公使は、各国で局外中立を希望しており、未だ中立解停の時機に至らないので、朝廷側にも旧幕府側にも渡すことができない、強いて望むなら、本国政府に諮って、大統領の指令によって可否を答えると言って承知しなかった。

だが、この甲鉄艦が旧幕府の老中などの斡旋によって奥羽越列藩同盟側に渡されては一大事なので、木戸孝允などは全額を支払っても之を手に入れようとして焦っていた。

閏4月15日、陸奥宗光はイギリスのグラバーと契約を結び、甲鉄艦購入費50万ドル(邦貨37万5000両)を借款することに決めたが、グラバーが大阪から横浜に行き、各方面に打診した結果、アメリカ出先当局が内乱中は甲鉄艦の引渡しを行なわない方針を堅持していることが分かったので、遂に直接交渉する迄には至らず、この借款問題はお流れになってしまった。

なお、5月13日、新政府は右の購入に関する最後の交渉を行なったものの、不首尾に終わったので、この購入費に流用しようとした25万両は、本来の目的通り彰義隊討伐費に充てられたと言われている。

一方、同盟側の方でも、平松スネルの主唱によって、甲鉄艦は元来は幕府の物だとして、之を手に入れようとして、懸命になっていたことは、前述の甘粕備後の『北越日記』などによって窺われることである。

また、このことについては『復古記』にも、

「是ヨリ先、旧幕府、米国ヨリ購買スル所ノ軍艦、横浜ニ到ル。神奈川裁判所、将ニ之ヲ交収セントス。米国公使、固ク局外中立ヲ執テ肯ンゼズ。

是ニ至リ。仙台・会津・米沢・庄内人等、新潟ニ会シテ、本艦ヲ交収センコトヲ謀リ、又、新潟港ヲ開キテ、互市場ト為シ、板倉勝静ヲ陸奥ヨリ迎ヘテ、以テ其事ヲ管セシメントス。新潟敗ルルニ及デ。其事遂ニ止ム。」

(『復古記』第13冊)

と記されており、この甲鉄艦購入について、新潟奉行所内の新潟会議所における模様がどのように『色部長門日記』に反映しているかと調べて見ると、

〔六月二十七日〕 一、奉行所江罷出る。鉄船評あり、並びに金策あり。

〔六月二十八日〕 一、鉄船買入一条に付、諸藩よりスネルへ罷越候事。

一、鉄船御買入に付、仙会我等三人に而庄太夫松平権十郎迄書状有。本間氏持参なり。

之によって、甲鉄艦購入について、東北諸藩の重役が弟スネルと相談したり、購入費の調達について話し合っていたことが知られよう。

なお、7月16日の条に、

一、アメリカ陸軍付医ハルリス

一、惣鉄将ブロン

と記されており、この二行は色部長門が書簡を提出した宛先人物の控えと推考されるので、後者は色部長門がエドワード・スネルと相談をして、甲鉄艦の船長ブラオンに宛てての依頼状を書いたメモ書きのように思われる。

7月25日、松ヶ崎で討取られた庄内藩中老石原倉右衛門所持の書類の中に、

「兩三日中出帆ノ英船ヘ托シ、奥羽越列藩申合せ、仙ハ除キ、会、米、庄一万兩ツツ、跡四万兩ハ本間友三郎（庄内人）立替候テ、鉄造船買入候事、

此事ハ柴田（新発田ノ誤）人ヨリモ聞ク、柴田ヨリモ二万兩差出セト、米、会ナド申付候ニ付、不得止、一万丈ケ出金ノ約定ニテ、已ニ新潟迄持出、米、会等ヘ相渡ス覚悟ノ処、官軍松ヶ崎揚陸ニ付、柴田ヘ取帰候由。」

（『復古記』第13冊）

とあり、また、『新発田藩戊辰始末』には、

「是ヨリ先、米会仙桑等ノ諸藩、新潟ニ会議シ、独逸人『スネル』ヨリ鉄艦ヲ購ハントシ、我ニ迫リ、二万兩ヲ出金セシメントス。議未成而、官軍来伐シ、事竟ニ止ム」

（『新発田藩戊辰始末』7月25日）

とあって、幕府で支払い残した金額を集めて、甲鉄艦を引取ろうと計画していたことが知られ、之にはエドワード・スネルも関与していたことは確かである。

お わ り に

本稿第一部は戊辰戦下の新潟におけるスネル兄弟が『色部長門日記』に如何なる呼名で、どのような頻度をもって現われてくるかということを精査することによって、兄ヘンリーと弟エドワードとの別を明らかにしたものである。

この兄弟が僅かな期間に、このように屢々（合計28回）現われてくるのは、恐らく『色部長門日記』を描いては、他に見ることができないであろう。

これは、新潟において色部長門がスネル兄弟と、それ程深い関係にあったことを語るものであるが、兄ヘンリー・スネルが会津から新潟へ来たのは、慶応4年5月29日午前2時頃であって、その後、6月10日から同18日迄は中越戦線を巡視して、後、新潟へ戻り、6月26日には既に下関滞陣中の米沢藩主上杉齊憲公に面謁しているので、実際、兄スネルが新潟にいたのは、6月上旬の10日間と、19日から25日迄の7日間、即ち、その合計日数は6月中の僅か17日だけに過ぎなかった。

それも、甘粕備後継成の『北越日記』（6月10日の条）に「（米沢藩総督千坂太郎左衛門、平松スネルと）共に越後へ出張の処、大面の戦始まるに会して、新潟へは赴かず、直ちに戦地に至って指揮する。之によって、新潟へは色部太夫其方面の総督として参られて処、スネルは色部を悦ばず云々」ともあって、平松スネルと色部長門との関係は、やや儀礼的であり、親密と迄はなかったようである。

然るに、色部長門と弟スネルとの関係は、色部が新潟の管理を引受けた6月1日から新潟陥落の7月29日迄の約2か月間にわたり、弟スネルはこの間の6月12日から同21日迄、イタリア商人と共に米沢領置賜地方へ行ってはいるものの、色部はこの間にあっても、弟スネルを念頭に置いて「スネル、米沢迄参り候由」（6月16日の条）と記し、17日には夜中に弟スネルを迎えさせるために青木を関表迄派遣したのであった。

本稿第二部は、新潟開港問題に関連して、弟スネルが新潟総督色部長門の心理と行動とを如何に強力に支配していたかということを、新潟奉行所、新潟会議所などにおける弟スネルの言動に

よって之を具体的に明らかにしようとしたものである。

このことが同盟側の最高人事にも及んでいたことは、黒井小源太の『七月朔日新潟奉行所ニ而応接』の中の「当港ニ大統領ヲ置クベシ云々」「議政府ニ家老ヲ出スナルベシ。其長ニ板倉侯、小笠原侯然るべし」、或いは長尾景貞日記7月9日の条の「新潟開港ニ相成候ニ付テハ外国ノ事情ニ通ジ候全権之人、無之テハ相成間敷ト以前スネルも建議有之候由ニ而、当時板倉侯ト小笠原侯云々」などによっても明らかなことであり、スネルは甲鉄艦購入問題や榎本艦隊の日本海回航等にも執心が深かった。

要するに本稿に引用した『色部長門日記』『長尾景貞日記』等に現われてくる弟 スネルについて、之を総合して考えてみると、弟スネル即ちエドワード・スネルの同盟側に対する打ち込み方は、単なる外人武器商の立場を逸脱し、なお、戦の勝敗の見通しにさえも盲目となって何か或る執念の囚となっていたように感じられる。

この執念は甲鉄艦の入手に失敗し、新潟陥落後、彼が庄内に身を寄せた頃には益々熱狂的となって、庄内藩・米沢藩の首脳部に対して、今度は軍艦三艘購入の強要までするようになっている。

これは早く見切りをつけて、続々と官軍に降伏してゆく当時の日本人とは全く対照的である。

〔注〕

(一) 『新潟開港百年史』40頁

(二) 『新潟開港百年史』40頁

(三) この「諸港」は、諸外国の公使領事等を指す色部独特の用語であって、諸藩の誤記などではない。

(四) 佐藤が横浜に入ってから動きは、今泉亨吉氏『怪商スネル兄弟』（『置賜文化』56号）による。

(五) これは桑田忠親著『日本合戦全集』6、維新動乱編（秋田書店）240頁、ただし、洞富雄著『幕末維新期の外圧と抵抗』（板倉書房）の465頁には、「機関610馬力で、厚さ3尺の船側を水下7尺まで5インチ半の鉄板で装甲し、33尺のラム（敵艦に衝突する）をもち、300斤の加農一門、75斤の砲二門を備えていた」とある。

なお、これを薩摩の軍艦の乾行丸についてみると164トン、主砲18斤、備砲6門、長州の丁卯丸は237トン、備砲四門とある。（大山柏著『戊辰役戦史』）

（1979年9月19日）